

イギリスの言語学

山元 卯一郎

The Development of Linguistics in Britain

Uichiro YAMAMOTO

本稿はイギリスにおける言語学の発達・変遷を概観しようとするものである。

言語観・言語研究は古代からあったけれども学としての言語学、近代言語学が成立したのは19世紀であり、その成立の端緒をなしたものはイギリス人 Sir William Jones (1746—1794) が東インド会社にいたときカルカットの王立アジア協会にインドの古典語サンスクリット語がラテン語・ギリシア語その他のゲルマン諸語と同族で歴史的親近関係を有することをのべた論文を1786年発表したことであった。ジョーンズは「サンスクリット語はその古さはともあれ、すばらしい構造を有しギリシア語より完全、ラテン語より豊かであり両者以上に洗練されている。しかも動詞の原形なり文法の形態において偶然以上の強い類似をギリシア語・ラテン語に示しており、サンスクリット語・ギリシア語・ラテン語を調べるとそれらが同じ源から出ていると信ぜざるを得ない、ゴート語・ケルト語もサンスクリット語と起源を同じくしているのではないかと思われるふしがある」と述べている。ジョーンズの論文に端を発するサンスクリット語学はイギリスにおいては大した成果を見せずドイツにおいて見事な花を咲かせた。1808年ドイツ人 F. Schlegel(1772—1829)が *Über die Sprache und Weisheit der Indier* (On the language and the learning of the Indians) という論文を発表し

サンスクリット語と他のインド・ヨーロッパ諸語との同族関係や屈折・派生・構造の比較研究を論じ、はじめて比較文法 (vergleichende Grammatik) なる言い方を用いた。ついで1816年ドイツ人 F. Bopp (1791—1867) が「サンスクリット語の動詞活用組織について——ギリシア語・ラテン語・ペルシア語・ゲルマン語の動詞活用組織との比較における—」(Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache in Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen, und germanischen Sprache) において比較方法を用いて言語研究を、より精緻なものとした。1818年デンマーク人 R. Rask (1787—1832) は Undersøgt om det gamle nordiske eller islandske sprogs oprindelse (Investigation on the origin of the old Norse or Icelandic language) なる論文において、はじめてゲルマン諸語の間における音声推移の法則を明らかにし、言語の同族関係は語彙だけでなく音韻論・形態論の面においても立証されねばならぬとし、Bopp や Grimm とともに比較言語学の基礎をきずいた。J. Grimm (1785—1863) の著書 Deutsche Grammatik (ゲルマン語文法, 1819—1837) はゲルマン言語学の出発点となったものであり、動詞等の変化について言われる強変化 stark (strong)・弱変化 schwach (weak)、母音変差 Ablaut (vowel gradation)、母音変異 Umlaut (mutation) などはグリムによって発明された術語であり今日も使用されている。グリムの言語学上における第一の功績はラスクによって先鞭をつけられたインドヨーロッパ諸語間における音韻法則を更に広範囲にまとめて所謂グリムの法則 (Grimm's law, Erste Lautverschiebung) を樹立したことであって、これは彼のゲルマン語文法の第二版 (1822年) に発表された。1833年には Bopp がその比較文法 (Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Griechischen, Lateinischen, Litauischen, Gotischen, und Deutschen) において比較文法の諸原理を提示し、諸言語を支配する

法則を探究するのがその目的であるとのべている。

1786年イギリス人 Sir William Jones によって先鞭をつけられたサンスクリット語研究は、その後、主としてドイツ人によるサンスクリット語学となり、同時に古代インドの言語研究法がヨーロッパに知られるようになり、ヨーロッパの言語研究に大いに刺戟を与え、上述の1816年—1818年—1822年—1833年と劃期的年を経て19世紀前半において、ゲルマン言語学、インドヨーロッパ言語学、史的比較言語学の確立を見るわけでラスク、グリム、ボップは歴史言語学比較言語学の創設者と言われるのはもっともなことである。〔この期において、当時としては主流ではなかったが現代言語学の立場から、特に変形生成文法理論からすれば極めて重要な意義を持つ W. von Humboldt (1767—1835) がいる。〕

19世紀の半ばにおいて重要な言語学者はインドヨーロッパ諸語の共通の祖語 (Ursprache) を再建し、諸言語間の歴史的関聯において樹枝状をなすとする所謂、樹枝説 (Stammbaumtheorie) を唱えた A. Schleicher (1821—68) であり、1861年の著書「インドゲルマン諸語比較文法概論；インドゲルマン祖語の音韻論・形態論大要」 (Compendium der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen ; kurzer Abriss einer Laut- und Formenlehre der indogermanischen Ursprache) の表題は比較言語学が概論という形で体系的に叙述されるまでになったことと、副題はシュライヘルの言語理論がインドヨーロッパ祖語を仮定し、その音韻や形態に注意を向けるようになったことを示している。シュライヘルの樹枝説は J. Schmidt の波状説 (Wellentheorie) により補正された。

19世紀の終り、1870年代以後にいたって「新文法家」(Junggrammatiker, neogrammarians) が「類推・借用によらない限り音韻法則に例外なし」とい
20—人 II, III—201

う命題をかかげ、言語理論、研究法に大きな変化をもたらし、死語や古い文献に書かれた文字に注目し過ぎていた傾向から、生きた言語・方言に考察の目を向けるようになった。この派に属する言語学者たちは A. Leskien, K. Brugmann, H. Osthoff, H. Paul などのドイツ人であり、20世紀の言語学にも大きな影響を与えた。中でも Herman Paul の「言語史の諸原理」(Prinzipien der Sprachgeschichte, 1880) は Junggrammatiker 一派の成果を集大成して、史的言語学の理論の頂点を示すものと言われている。

極めておおざっぱな言い方をすれば、19世紀の言語学は史的比較言語学 (comparative and historical linguistics) であった。この史的比較言語学のおこる端緒をつくったのは、イギリス人であつたが、これを大成したのは主としてドイツ人であった。イギリスはそのドイツ言語学の成果を輸入したのであり、その吸収、消化、応用にあずかって力があつたのは Max Müller (1823—1900), Henry Sweet (1845—1912), Joseph Wright (1855—1930) などであった。

Philology から Linguistics へ

イギリスでは、philology という語は文献学・言語学両方の意味に用いられ広義の文献学即ち言語を手段として一民族あるいは一国民の文化を研究することを目的とするにしても、狭義の場合の西洋の古代、特にギリシア・ローマの学問・文学・言語の研究を意味するにしても、文献学の方が言語学より古い伝統を持っている。Oxford English Dictionary の philology の項を見ると、文献学の意味での初出用例は1614年で17世紀のはじめ頃から用いられていたことが分かるが、言語学の意味での初出用例は1716年で18世紀となっており、文献学の方が言語学より古いことを物語っている。言語学を意味する英語は philology, linguistics, linguistic science, science of

language などで science of language は古い表現で Max Müller: Lectures on the Science of Language. 2 vols. London 1861—1899 や A. H. Sayce: Introduction to the Science of Language. London. 1880 などに見られるが今日では用いられない。 linguistic science は E. H. Sturtevant: An Introduction to Linguistic Science, Yale, 1947. と例はあるが割合に少いようである。多く用いられてきたのは philology と linguistics で上に述べたことと後述によりイギリスの言語学は philology から linguistics へと発展して行ったと言えると思う。

イギリスの用法として philology が comparative philology の意味で使われることがあり、この comparative philology は今日では比較言語学歴史言語学 (comparative and historical linguistics) を意味するやや古い使い方である。イギリスにおいて大学に比較言語学の講座がおかれたのは 1860年 Oxford 大学に初代の Professor of Comparative Philology としてドイツ生れでイギリスに帰化した言語学者 Max Müller が就任したのにはじまる。この comparative philology 教授の地位は Joseph Wright によって 1901年に引きつがれるのであるが、1900年 Max Müller の死により空席となったこの比較言語学講座の椅子をめぐる Henry Sweet と Joseph Wright が争ったことはよく知られている。Sweet と Joseph Wright はイギリス言語学の発達にとって重要な貢献をなした人物で、両者ともにドイツに留学し、ドイツの史的比較言語学の影響を受けた。

スウィートは天才的言語学者、英語学者でその業績は英語学・音声学・一般言語学と多方面にわたっているが、ここでは一般言語学との関連、一般言語学への貢献についてのみ述べることにする。佐々木達氏「言語の諸相」(453頁)によれば、スウィートが比較言語学における Schleicher, Max 20—人 II, III—203

Müller, Whitney (1829—1894, ドイツに学んだアメリカの言語学者, *Language and the Study of Language*. 1867 や *The Life and Growth of Language* 1875 の著者) などの業績に通じ、その進歩と絶えず接触を保っていたばかりでなく、新しい事実や原理を十分に咀嚼していたことがわかる。ことに1870年以後、新文法家学派 (Junggrammatiker) の音韻法則と類推の強調には著しい共鳴を感じた。中でも Herman Paul には教えられるところがきわめて多かったように思われる。C. L. Wrenn: *Word and Symbol* 1967 (p. 150—p. 169, *Henry Sweet*) によれば、スウィートは Baudouin de Courtenay と共に、お互いに接触なくして、1877年頃、新しい重要な考え方即ち、音素という概念に達している。de Courtenay は、現実の音 phone と区別する音素 phoneme という語を用いているが、スウィートは Broad Romic (簡略表記法)を用いて音素的な考え方を示している、即ち *History of English Sounds* 1888 の序文に It will be observed that I use the less accurate “Broad Romic” as a kind of algebraic notation, each letter representing a group of similar sounds. 「新英文法」(*New English Grammar, Historical and Logical*. 2 vols. 1891, 1898) はその副題からも、うかがえるように言語学に土台を置く最初の英文典と言ってよいだろう。1877年頃彼は「比較文法」に関する大部の *Studies in the Comparative Grammar of the Living Languages* を計画したがこれは実現しなかった。晩年の *Word, Logic and Grammar* (1876), *The History of Language* (1900), *Linguistic Affinity* (1900) は小冊であるが彼の一般言語学上の研究成果を簡潔に示したもので、現在、問題にされつつある「言語の普遍性」ということも考えつつあったようである。彼は一生、当時の言語学の主流であった歴史的比較言語学に考究の眼を向けることを怠らず、その進歩に後れることは決してなかった、それどころか現代言語学の主流である記述言語学的発想も随所に見

ることができる。英語学、音声学、一般言語学などにおいて、イギリスでは曾ってないすぐれた成果を示したスウィートの学統は細々とした形でイギリス人自身の手に引き継がれたが、大きくは、デンマーク人 Otto Jespersen に受け継がれ *Modern English Grammar on Historical principles* 7巻; *Language, its Nature, Development and Origin; Philosophy of Grammar* などの輝やかな業績を生むにいたった。イエスペルセンの *Essentials of English Grammar* (1933) がイギリスで普通に用いられている文法書であると *Our Language*, 1950 (124頁) で Simeon Potter が述べていること、また T. S. Eliot が「批評における実験」の中で「近代的批評家はコペンハーゲン大学のイエスペルセン教授のような現代の言語学者の著作にもいくらか通じていなければならない」と述べているのもイエスペルセンの評価の高いことと、イギリスにイギリス人の著作になる適当な文法書がなく外国人の手に成る文法書を用いていることで、この頃のイギリス言語学の貧困を物語っていると言ってよいのではなかろうか。

Joseph Wright にうつると、彼は、上述スウィートの独創的業績に比し、地味で忠実な、比較言語学の祖述者と言うべきであろう。ドイツで Osthoff, Leskien, Brugmann の指導により新文法家学派の比較言語学を研究し、1888年には Brugmann の著書を英訳しドイツの比較言語学を紹介した。Oxford 大学の Taylor Institution の Teutonic Philology の講師 (1890年, 35才)、比較言語学代理教授 (1891年) を経て1901年比較言語学正教授となり1920年までこの Professor of Comparative Philology の地位にあり、1930年死ぬまで、一生を比較言語学のために捧げた。ライトの最大の貢献は、この時なされなければ恐らく不可能となったであろう、イギリス方言の集大成である。The English Dialect Dictionary (EDD) 六巻 (1896—1905) を

完成したことである。この一つだけでライトの名は永久に残るであろう。彼の主著作というべき The English Dialect Grammar (1905), Old English Grammar (1908) は史的比較言語学の原理に拠るものである。

イギリス言語学の発達に密接な関係を有するものとしてイギリスの言語学会 The Philological Society を逸することはできない。同会は1842年約200人の会員をもって、「言語の構造・親近関係・歴史を研究する」目的で設立され、今日にいたっている。定期的にロンドンで、時にはオックスフォード、ケンブリッジ大学その他イギリス北部の諸大学で、会合がもたれ、論文の発表が行われる。創立以来会報(1853年まで Proceedings, 以後は Transactions of the Philological Society) が現在にいたるまで刊行されている。会員の中に前記 Henry Sweet の外、Walter Skeat(1835—1912, 英語語源辞書の著者), James Murray (1837—1915, OED の編集者の一人), F. J. Furnivall (1825—1910, OED 計画者の一人) A. J. Ellis (1814—1890, Early English Pronunciation 1869の著者), Henry Bradley (1845—1923, OEDの編修者の一人, The Making of English 1904の著者)などを数えることができる。同会の歴史的大事業は A New English Dictionary on Historical Principles, founded mainly on the materials collected by the Philological Society の刊行で1884年から1928年にいたって完成され1933年補追巻 Supplement が出された、世界最大最良の英語辞書で厳密な史的原理(on Historical Principles)に立って語の形態の歴史、語義変遷の歴史を、発見し得た最も早い時期のものから順に豊富な引用文で例証している。編修者は James Murray, Henry Bradley, William Craigie (1867—1957), C. T. Onions (1873—1965)とイギリスのすぐれた言語学者たちである。現在では Oxford English Dictionary と称され OED と略称される。Dictionary of National

Bigography, Encyclopaedia Britannica, English Dialect Dictionary とともにイギリスが世界に誇るに足る辞書であり、この OED をもとにして幾多の良辞書が生れ、辞書編修の水準を高くし、言語に対する考え方を改めさせ、英語学・言語学研究に多くの便益材料を提供している。

英国方言辞書 (EDD) にしても、またオックスフォード英語大辞典 (OED) にしても、当時の言語学界の主流であった史的比較言語学の強い影響により、生み出されてきたと行うことができるであろう。

P. M. Roget の Thesaurus of English Words and Phrases (1852年初版) はアルファベット順に単語を並べる普通の辞書の形態をとらず意味を基準にして分類排列した最初の辞書であり、C. K. Ogden と I. A. Richards との共著「意味の意味」The Meaning of Meaning (1923年初版) とともに、意味論の分野において正当な歴史的位罫づけがなされるべきである。

長い間 (120年余り) 続いてきたイギリスの代表的言語学会 The Philological Society が今日も philological という語を用いながらも、同学会報 Transactions に、イギリス現代言語学の創建者 J. R. Firth が 1940 年代、1950年代に linguistics についての論文を linguistics という語を用いて多数寄稿していること、また、1959年に The Linguistics Association of Great Britain という新しい言語学会が設立され、1965年その機関誌として Journal of Linguistics (Cambridge University Press, 年2回発行) を刊行し、1968年までに 4 巻 8 冊を発行している。このことは、イギリスの言語学が philology から linguistics へと移って行ったことを示している。

現在、英語学を表わす英語の表現として従来の English Philology から English Linguistics へと変ってきたことも矢張り、イギリスにおいて 'philology' から 'linguistics' へと移ったことを示すものである。

19世紀言語学の主流は前述の通り史的比較言語学でありイギリス言語学もその影響の下に比較言語学であり、イギリスの大学には比較言語学の講座 Professorship of Comparative Philology がおかれ、それが長く続いてきて今日でも比較言語学の名称のもとに一般言語学の研究も行われている。イギリス言語学においてすぐれているのは、イギリス派音声学 (English School of Phonetics) という呼称のあることから窺われるように「音声学」の面と、オックスフォード英語辞書や英国方言辞書など世界に範を示した辞書を作ってきた「辞書編修」(lexicography) の面、この二つであろう。英語学一般についてはイギリスより他の国々で盛んであり、特にドイツは英語学のメッカであった。第二次世界大戦まではそうであった英語学に関する最高峰の学術雑誌 *Anglia* (1878年創刊), *Englishe Studien* (1877年創刊) がドイツで発行されてきたことでも知られる。

概括的には、19世紀は史的比較言語学(通時言語学)の時代であり20世紀は記述言語学(共時言語学)の時代と言ってよいだろう。現代言語学の理論、方法論の樹立に最も大きな貢献をなしたのはヨーロッパではソシュール Ferdinand de Saussure (1857—1913), トルベッコイ Nikolai Sergejevic Trubetzkoy (1890—1938), メイエ Antoine Meillet (1866—1936), イエールムスレウ Hjelmslev (1899—1965), アメリカではサピア Edward Sapir (1884—1939), ブルームフィールド Leonard Bloomfield (1877—1949) であり、イギリスにおいてはファース J. R. Firth (1890—1960) の名を逸することはできないであろう。

20世紀の記述言語学はソシュールの一般言語学講義(Cours de linguistique générale) が出版された1916年に始まると言ってよい。まさに言語学におけるコペルニクスの転回であった(メイエ)。

記述言語学の主流、構造言語学 (Structural Linguistics) は直接間接に

ソシュールにその根を持つものであり、コペンハーゲン学派・プラーグ学派・アメリカ学派などの諸派を生じイギリスはこれら諸派の影響を受けつつ、イギリス言語学の伝統を継承し、20世紀後半にいたり一般言語学 (General Linguistics) の興隆を見るにいたるのであるが、それは全く J. R. Firth の努力によると言っても過言ではあるまい。

フ ァ ー ス 略 伝

John Rupert Firth (1890—1960) は1911年リーズ大学卒業 (歴史専攻)、2年後同大学で M. A. をとり、しばらく歴史の教師をして、第一次世界大戦前年1914年インドに行き Indian Education Service に加わり、インド現地語の研究に従事、1914年から1918年まで世界大戦のため軍務に服しインド、アフガニスタン、アメリカへ行った。大戦後1920年から1928年までインド、ラホールのパンジャブ大学の英語教授、1928年英国へ帰り、ロンドン大学音声学科でダニエル・ジョーンズ教授の下で講師 (Senior Lecturer) となり1938年まで同大学に勤務している間、政治経済学部や東洋研究学部などに出講し、特に経済学部には人類学者マリノウスキー (Bronislaw Malinowski) を知ったことはファースの言語理論の形成に大きな影響を与えた。1938年ロンドン大学、東洋アフリカ研究学部音声学言語学科でロイド・ジェイムズ教授の下で言語学インド音声学の講師、1940年助教授、1941年ロイド・ジェイムズの後をうけて科長となった。1944年第二次世界大戦中、ロンドン大学に一般言語学の講座が設けられ、ファースはイギリスで、はじめての Professor of General Linguistics となり、1956年引退するまでその職にあった、その間、イギリスにおける言語学の発展、言語理論の開発に努力し、所謂ロンドン言語学派または、ファース学派と言われる言語学を樹立した。1941年音声学・言語学科長となった時はその下に

一人の講師がいただけであったのに、1956年引退時にはファースの外に一般言語学助教授1名、音声学助教授2名、言語学講師3名、音声学講師6名と増加しており、イギリス全体としても、エディンバラ大学、グラスゴウ大学、マンチェスター大学などに一般言語学や音声学の講座が新設・増設され、今日では古くからある「比較言語学」、「音声学」や個別言語の教授、例えば Professor of English Philology などの講座の外に「一般言語学」の講座が10余りの大学におかれるようになったのはファースの強い影響によるものと考えられる。

ファースはイギリス内外の大学で講義・講演をし、また内外の言語学会会員であったが、中でも、The Philological Society of Great Britain のために尽力し、1933年から会員、1934年理事、1954年から1957年まで会長、1957年から1960年彼が死ぬまで副会長であった。同学会の会報 (Transactions) には多くの論文を発表した。

ファースの言語観・言語理論

言語とは人間の生の一形態であり、意味を表わす恣意的記号・合図の組み合わせ体系ではない。人間が言語音声を出すことは人間にとって根源的のものであり、それは関聯のある事柄・環境に密接に組みこまれている。読む時にも書く時にもまず第一に自分に話しかけていると考えられる、自己理解がなければ他人との間に理解を共にすることはできないであろう。大切なのは「理解」であり「伝達」ではないことは注目すべきことである。言語を何かを表現するもの、伝達するものと考え、言語とは、われわれの内奥の心的状態を示す道具だということになり、この考え方は否定されるべきである。精神と肉体、思考と言語、語と意味、表現と内容、指

示するものと指示されるものというような二元論的考えは不必要であり、誤りであり、意味を見えない心的過程における関係とするオグデン・リチャーズの見方は排除さるべきである。言語を音声による思想の表現であるとか、精神の内部作用を外部に表わしたものとか、伝達のための表現というような古い言語解釈は精神と肉体を分つ二元論に立つもので認められない。言語学は人間の精神と肉体を統一体としてとらえ、人間とその環境は一つであるとし、特定の条件のもとにある「場」において現実にい用いられた話しことば、書きことばの選択された形態を研究することにより、言語とは何であるかを叙述しようとするものである。

言語学は方法論に深入りすべきでなく、理論に格別の努力を払うべきであるとしそれでファースは Zellig S. Harris : *Methods in Structural Linguistics* には賛成できなかった。言語分析の方法には公理的アプローチ、手続的アプローチ、理論的アプローチといくつか考えられるが理論的アプローチと経験アプローチの統合された併用を良しとする、即ち全一なるものとしての理論は、過去の経験的知識を土台にして、現時点より出てくるものである。

ファースは方法、手続より理論を重視した、しかし具体的言語の存在を忘れた言語学、人間不在の言語学理論には賛成できなかった。

通常の言語活動は正常な生活パターンの維持に向けられる“意味”をもつ努力であり、あらゆる発言は文化的限定をうけた「場」の前後関係においてなされる、発言の意味は話し手が生活している社会生活のパターンの維持及び話し手の社会的役割、個性の主張に貢献するものと認められるすべての特徴の総和である。このような発言は資料にことごとく表われないので抽象化がなされなければならない、相互に違ひ、かつ上下関係の秩序

をなす分析レベル (levels of analysis) 即ち音声レベル、音韻レベル、文法レベル、語彙レベル、意味論レベルにおける各資料から抽象しなければならない。すべてのレベルにおける分析が「意味」との関係においてなされるべきである。

アメリカ構造言語学の主流ブルームフィールド学派が観察可能な外形、音声から出発し音素を見出し、レベルを厳密に分離し、意味を基準とすることを排除したこと (Text signals its own structure) に比し、ファースは「意味」こそ言語学において重要であるとし、分析の各段階で意味基準ということを常に考えたことは注目に値する。また今日チョムスキーを中心として変形生成文法理論の開発とこの理論による言語の研究が進められつつある現在、「意味」を根幹におく立場で、ファース学派の言語理論は見直されるであろうし、相互に影響し合うことが今後ともに考えられる。

ファース言語学において注目すべき二つの考え方は音韻論における prosodic analysis と意味論における場・文脈・コロケーションの重視である。前者は音韻分析に関する用語で phonematic units と prosodies により音韻構造 (structure) と音韻組織 (system) を叙述する。phonematic units は子音と母音に分かれ、分節として時間的に横に連続するものとして順序づけられる。prosodies はアメリカ構造言語学派の suprasegmental phoneme と同じく stress, length, pitch, juncture を扱うがそれ以上に範囲が広く retroflexion, palatal, non-palatal の如き要素を入れるなど幅広く考える。ファースが音韻論を文法と現実の発話とを結びつけるものとし、文法と音声との間に入れたのは現在、変形生成文法派の考え方と軌を同じくするものである。

言語の意味とはコンテクストの中における機能である。その記述のために各レベル—音韻、文法などのレベル—において扱われ場・環境から統辞、語彙、音韻、音声へと上から下へ、あるいは逆に下から上へと、いず

れの場合にあいても、「意味」の様式として考える。

すべての科学と同じく言語学も特別な専門用語が必要であるとし、ファース自身が重要なものとして挙げているのは levels of analysis, context of situation, collocation, extended collocation, colligation, structure, system, element, unit, prosody などである。

ファースは晩年「言語学の諸原理」(Principles of linguistics) 及び「英文法」の著述の計画を持っていたが、それは果たされないままであった。

彼は言語学の学としての独立性、自律性を強く主張したが、狭い立場にたてこもることなく、人類学、社会学、文学と諸学総合の広い立場に立ち柔軟な見方をとり、また彼自身 English School of Phonetics という論文を書いている通り Ellis, Bells, Sweet の伝統を受けつぎ特に Sweet を先達として仰ぎ Daniel Jones の直接指導のもとに大きな影響をうけたとし、インド、アジア、アフリカの言語研究というイギリスの伝統を引く伝統主義者でありイギリス言語学の伝統に深く根ざしながら、独創的言語理論を建設し、すぐれた後継者を育成してイギリスにおける一般言語学の確立をなしとげた。

(1969. I. 24)

文 献

J. R. Firth の著作

Speech, pp. 80. London: Benn's Sixpenny Library, No. 121 1930 (1964再刊)

The tongues of men, pp. vii, 160. London, Watts and Co., 1937 (1964再刊)

Papers in linguistics 1934—1951, pp. xii, 233. London, Oxford University Press 1957 [この論文集には次の16篇が集められ、ファース理論を示す重要なものは 3, 10, 14, 15, 16 であろう: 1. The Word 'Phoneme'. *Le Maître Phonétique*, No. 46, 1934 2. The Principles of Phonetic Notation in Descriptive Grammar. *Congrès International des Sciences anthropologiques et ethnologiques*, 1934 3. The Technique of Semantics. *Transactions of the Philological Society*, 1935 4. The Use and Distribution of Certain English Sounds. *English Studies*, xvii. 1935 5. Phonological Features of Some Indian Languages. *The Proceedings of the Second International Congress of Phonetic Sciences*, 1935 6. Alphabets and Phonology in India and Burma. *Bulletin of the School of Oriental Studies*, viii, 2, 3, 1936 7. The Structure of the Chinese Monosyllable in a Hunanese Dialect (Changsha). *Bulletin of the School of Oriental Studies*, viii. 4, 1937 8. The English School of Phonetics. *Transactions of the Philological Society*, 1946 9. Sounds and Prosodies. *Transactions of the Philological Society*, 1948 10. The Semantics of Linguistic Science. *Lingua*, i. 4, 1948 11. Word-Palatograms and Articulation. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, xii. 3, 4, 1948 12. Atlantic Linguistics. *Archivum Linguisticum*, i. 2, 1949 13. Improved Techniques in Palatography and Kymography. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, xiii. 3, 1950 14. Personality and Language in Society. *The Sociological Review*, xlii. 2, 1950 15. Modes of Meaning. *Essays and Studies (The English Association)*, 1951 16. General Linguistics and Descriptive Grammar. *Transactions of the Philological Society*, 1951]

A synopsis of linguistic theory 1930—55. *Studies in linguistic analysis* (Special volume of the Philological Society), Oxford, Basil Blackwell, 1957 (ファース理論をファース自身の手で最も完全な形で述べたもので Levels of meaning, Context of situation, Collocation, Colligation, Exponents, Structure and system, Grammar and phonology, Stylistics, Lexicography, Translation などについての考えがのべられている)

Tongues of men and Speech, pp. x, 211 London, Oxford University Press 1964.

Selected Papers of J. R. Firth 1952—59 pp. x, 209 London, Longmans. Edited by F. R. Palmer 1968 (次の12篇の論文が収められている: 1. Linguistic analysis as a study of meaning. Nice Colloquium, 1952 2. The languages of linguistics Summer School, Oxford, 1955 3. Structural linguistics. Transactions of the Philological Society 83—103, 1955 4. Philology in the Philological Society. TPS 1—25, 1956 5. Linguistic analysis and translation. For Roman Jakobson, Essays on the occasion of his sixtieth birthday, The Hague 1956 6. Linguistics and translation. Birkbeck College London, 1956 7. Descriptive linguistics and the study of English. Berlin, 1956 8. A new approach to grammar. Bedford College London 1956 9. Applications of general linguistics, TPS 1—14, 1957 10. Ethnographic analysis and language with reference to Malinowski's views. 1957 11. A synopsis of linguistic theory, 1930—55 12. The treatment of language in general linguistics. The Medical Press, 1959.

In memory of J. R. Firth Edited by C. E. Bazell, J. C. Catford, M. A. K. Halliday, R. H. Robins. London, Longmans 1966 (ファースの指導を受けたもの及び関係者の27篇の論文が捧げられているがそのうち Jeffrey Ellis: On contextual meaning W. Haas: Linguistic relevance. M. A. K. Halliday: Lexis as a linguistic level T. Hill: The technique of prosodic analysis John Lyons: Firth's theory of 'meaning' Angus McIntosh: Predictive statements T. F. Mitchell: Some English phrasal types Randolph Quirk and David Crystal: On scales of contrast in connected English speech などとともに Roman Jakobson: Henry Sweet's paths toward phonemics がある)

M. A. K. Halliday, Angus McIntosh, Peter Strevens: *The linguistic Sciences and language teaching*. London, Longmans 1964.

D. Terence Langendoen: *The London school of linguistics*. Research monograph no. 46 The M. I. T. Press, Cambridge, Massachusetts 1968.

R. H. Robins: *General linguistics*. London, Longmans 1964.

R. H. Robins: A short history of linguistics. London, Longmans 1967.

R. H. Robins: 'John Rupert Firth,' Language 37. 191—199 1961.

佐々木達: 言語の諸相 三省堂 1966.

C. L. Wrenn: Word and symbol. London, Longmans 1967.